



財団設立 30 周年にむけて

2023 年は、ロシアのウクライナ侵攻が続く混とんの中で始まりました。21 世紀のヨーロッパでこのような形の戦争が起こったことに加えて、日本が短期間で国の基本となる安全保障戦略とエネルギー戦略の転換を行い得たことにも驚きます。私たちが世界史レベルの大転換期に生きていることを改めて感じます。COVID-19 パンデミックも3年におよび、それぞれの国の国民性や文化、政治体制、経済力、医療制度、科学力の違いを顕わにしています。社会のあり様が変わり、元に戻れない変化、元に戻す必要のない変化が何か、よく考えなければならぬ時が来ています。

私共の財団は今年30周年を迎えます。財団設立のために私財を投じてくださった方、財団運営に人知れぬご苦勞を引き受けてくださった方、直接お目にかかってご挨拶申し上げる機会がなかった方を含めて財団維持に欠かせない賛助会員としてご支援くださった方、すべての方々に衷心より御礼申し上げます。振り返りますと、1991年の設立準備室開設から1993年の財団設立の期間は日本経済のバブル崩壊と重なり、その後政策金利の急激な低下はマイナス金利まで行きます。初代会長・松本先生はこの激変に対して、20年前にすでに次のように書き残されています。「ここ数年の状況下、財団の運営は、はるか予想を超えて、大変困難と言わざるを得ません。にも拘わりませず、活動を続けてまいることができましたのは、いろいろな形で財団を支えてくださる方々のお陰以外のなにものでもありません。・・・これは、ただ病気への同情からくる善意だけではない、もっと深いところに根ざしたお互いの『きずな』から生まれてくるもののように感じられます」(2002年B&C)。現在もこの困難が変わることはありませんが、幸い

にも私たちを支えて下さる『きずな』の存在もまた変わることがありません。

わが国の急速な少子化は周産期・小児医療に危機的状況を招いただけではなく、二分脊椎や水頭症に取り組む医師や研究者の減少をもたらしました。大学等の研究における外部競争的資金への依存や経営改善の圧力が強まり、研究環境には厳しいものがあります。私共の財団による継続的な研究助成の重要性はかえって増しています。審査委員の先生からの貴重なご指摘にも気を配りながら、研究助成を進めてまいります。COVID-19 流行によってシンポジウム形式の会を開催することがむずかしい中、30周年に向けて昨年から取り組んでおりますホームページの改訂を通じた啓発に力を入れたいと存じます。また、「二分脊椎」に関する冊子を記念出版し、今後の継続的な出版活動の枠組みを作ることができればとも考えています。私共の財団が、松本先生に何かしらご縁のある方々に支えられていることを、松本先生の記憶とともに大切にしていきたいと思います。先日、江田島の海上自衛隊幹部候補生学校(旧海軍兵学校)を訪問し、水交会呉支部 佐々木孝宣会長と梶元大介学校長にご案内いただき施設内の由緒ある場所を見学させていただき貴重な機会を得ました。松本先生の人生を決定づける16-18才の日々がそこにあった事を偲びました。

全国的な寒波で大雪の報道が続く中この原稿を書いています。今年はなぜか、豪華な桜の満開が待ち遠しく感じます。新しい年が実り多い年であること、そして皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

会長 長嶋 達也
(兵庫県立こども病院名誉院長)

財団選考委員として思うこと

選考委員会は、財団定款第4条(1)*に掲げる公益目的事業、研究助成の選考等を行うための機関です。「専門的な知識を有する者のうちから理事会の決議を経て、理事長が委嘱する」と定められています(定款第6章45条)。

* 第4条(1):二分脊椎、水頭症及びそれに関連する病態の予防法・診断・治療法の研究助成

山内 康雄 鶴見緑地病院名誉院長(脳神経外科) <財団選考委員会 選考委員長>



財団の活動の要でもある中枢神経系奇形、二分脊椎や水頭症についての研究助成は、故松本悟先生の抱かれた二分脊椎、水頭症の予防や治療をさらに進めたいという熱い思いにより発足し、今回で29回をむかえました。この助成は多くの賛助会員の方々のご支援により成り立っているユニークなものです。研究助成の概要、審査視点などについては故生田房広先生が礎を築かれ、長年にわたり選考委員長を務められました。私は、2008年から選考委員を仰せつかり、2016年11月に選考委員長の責を引き継ぐことになり現在に至っています。今後もこの分野の研究が多くなされ、その成果が患者さんの抱えておられる問題の解決に役立つことを祈っています。

卒業後、大学病院で脳神経外科の臨床に従事し、特に小児の患者さんの診療に携わっていました。これからも各分野のご高名な先生方の厳正な審査に助けていただきながら重責を果たしていきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

塩田 浩平 公益財団法人ひと・健康・未来研究財団理事長
京都大学名誉教授、滋賀医科大学名誉教授



私は、基礎医学の研究者として、形態形成のメカニズムとその過程で起こる発生異常の成因、病理発生について研究してきました。中枢神経系では、特に神経管閉鎖障害と全前脳胞症(holoprosencephaly)を中心に、疫学と実験的研究を行いました。発生障害に関連がある遺伝子異常が次々と特定されていますが、ほとんどの発生障害は遺伝要因と環境要因が複合的に絡み合って発症します。集団中の誰もが障害を持って生まれるリスクを多かれ少なかれ持っており、したがって、障害のある患者さんを社会全体が支えることが重要と考えます。

近年の医学医療の進展は目覚ましく、疾患の診断と治療の方法が大きく進歩しています。本財団は、二分脊椎と水頭症の治療、ケア、予防などに関する研究と患者支援を目的とするユニークな財団で、設立者・初代会長であられた松本悟先生の影響を受け継いでいます。財団の趣旨に合った意欲ある研究課題が数多く申請されることを期待しています。

新井 一 順天堂大学学長、順天堂大学名誉教授(脳神経外科)



日本二分脊椎・水頭症研究振興財団は、二分脊椎と水頭症の予防や治療を何としても進歩させたいとの故・松本 悟先生の熱意に、故・澤田善郎前理事長が応える形で平成5年に設立されました。そして、初めての研究助成は平成7年となり、阪神淡路大震災の約1ヵ月後にその授与式が順天堂大学で執り行われました。故・生田房弘委員長のもと多くの選考委員の尽力により助成の対象になる研究が選定されてきましたが、生田先生のご逝去を受け現在の山内康雄先生が選考委員長を務められることになり今日に至っています。私自身は平成18年に選考委員の一人に加えていただき、以降毎年二分脊椎や水頭症に関連する多くの研究課題の審査を担当しています。どれもこれも素晴らしい内容ですが、採択される課題数は限られていることから苦勞して順位をつけています。故・松本 悟先生の熱き思いに応え、これらの研究の成果が二分脊椎あるいは水頭症の患者さんに福音をもたらすことを大いに期待しています。

高田 哲 神戸市総合療育センター診療所長、神戸大学名誉教授（小児科）



1月3日に本財団の応募課題を読み始めるのがここ数年の仕事始めになりました。いつも感じるのは、限られたスペースに、研究の独創性と意欲を表現しようとする応募者の熱意と工夫です。数行の文章や表現に熱い思いが込められているのに気づき、微笑んでしまうこともあります。基礎研究や脳神経・泌尿器外科領域の応募課題が多く、小児神経科医である私には少々荷が重いのが実情です。審査に先だち、中枢神経系の発生や脳脊髄液の調節機構などを学び直すようにしています。初めて聞く遺伝子も多く、改めて関連文献を読むこともあります。一方で、論文検索をかけていると以前に選んだ応募課題に遭遇することもあり、研究の広がりや発展を感じます。自分が適切に選考できているのが不安になることも多く、後日送られてくる最終結果の中で、他の委員が同じ応募課題を推薦しているのを確認し、思わずほっとします。今も尚、松本悟先生の試験を受けているようです。

佐谷 秀行 藤田医科大学がん医療研究センター長、慶應義塾大学名誉教授



私は1981年に神戸大学医学部を卒業後、直ちに同脳神経外科に入局し、財団初代会長松本悟先生のご薫陶を受けた門下生の一人です。臨床医時代は多くの水頭症、二分脊椎症の患者様を主治医として担当させていただき、それらの疾患において解決すべき問題について勉強させていただきました。1987年に渡米して以来、基礎研究に身を投じることになり、分子メカニズムの観点から癌をはじめとする様々な疾患の研究を行い、現在に至ります。松本先生が会長ご在職時代から選考委員を務めさせていただき、主として申請者の研究の先進性、そして水頭症や二分脊椎など小児期に発生する神経疾患の問題点を解決するための研究としての価値を判断基準として評価させていただいております。常に、申請された研究の内容とそれに対する私の意見を、故松本悟先生にご説明させていただき気持ちで審査をさせていただいております。

井川 靖彦 長野県立信州医療センター泌尿器科部長



第27回（2020年）からこれまで3年間、選考委員を務めてまいりました。その経験を踏まえて印象に残ったことを紹介致します。本研究助成事業は、二分脊椎および関連病態、水頭症の病態及び治療、並びに中枢神経系奇形一般の原因や予防法に関する研究に対して助成し、これら疾患の成因、診断、治療技術、および予防法の開発を推進することを目指しています。しかしながら、残念なことに、この3年間の応募研究の傾向としては、第一に、二分脊椎や水頭症の実臨床の問題点に根差した臨床的研究の応募が極めて少ないことです。第二に、分子生物学的な手法を駆使した中枢神経系に関する基礎的研究が多く、少なくとも応募者はいずれも、水頭症や中枢神経系奇形一般の原因・病態に関連すると仮定しているが、果たしてそうかは疑問が残る研究テーマも少なくないことです。本来の研究助成目的に合致した多くの研究、特に臨床的研究の応募を期待しています。

数井 裕光 高知大学医学部神経精神科学講座



私は精神神経科医で、中でも老年精神医学を専門としています。高齢者において、先行疾患無く出現する特発性正常圧水頭症（idiopathic normal pressure hydrocephalus: iNPH）は、「治療可能な認知症」であるため、私達、認知症の人を診療する医師にとっては見逃してはいけない重要な病態です。また近年、iNPHが高齢者の0.2～3.7%という高頻度に存在することも明らかになり、iNPHの臨床現場における重要性が増しています。しかしいまだiNPHの原因、発現機序は明らかになっておらず、そのためシャント術を実施しても、その効果が長続きしない人がおられます。また実施前に、シャント術の効果を正確に予測する方法の確立も不十分です。そこで、選考委員としては、iNPHの病態解明、およびiNPHになっても自立した生活を長期的に行える状態にまで改善させる治療法の確立に資する研究の提案を期待したいです。

事務局からの **おたより**

新しい年がスタートしました。2023年がどうか良い一年でありますよう、願いながら今年初の機関誌をお届けします。

1月16日、新型コロナウイルスの感染が始まって3年が経ちました。今や我が国の感染者総数は3100万人を超え、4人に一人が感染しています。感染者への偏見がようやく薄らいできたように見えますが、まだまだ肩身の狭い思いをされることもあるようです。

感染が拡大し始めた頃、感染しただけで、まるで犯罪者であるかのような扱いを受ける有様でした。目に見えない未知のものに対する不安と疑心暗鬼、恐怖心をあおられることばかりで、国中がパニックに陥りました。そのような状況下、財団も2019年3月17日の役員会、第25回研究助成金贈呈式を最後に対面での役員会を控え、贈呈式の開催を見合わせることになりました。以降3年間、贈呈式をスキップし、受賞された9名の先生方とお会いしていません。たいへん残念なことで、大切な機会を失ってしまった感が強いです。

財団設立30周年(1)

当財団は1993年12月9日に厚生省(現 厚生労働省)所管の財団法人として認可されました。今年、設立30周年を迎えます。未だコロナの感染が気になるのですが、3月に第29回研究助成金贈呈式を開催致します。

当財団の事業は、二分脊椎や水頭症、先天性中枢神経系疾患の原因解明および治療法の開発に対する研究助成、患者さん方の療養支援、社会啓発活動です。その中で要となる事業が研究助成で、設立以来毎年継続して行ってきました。今までの授賞は110名(申請数721件)、助成総額は今年度、第29回目の贈呈で1億円を超えます。

この助成事業において、なくてはならないチームが選考委員会です。当財団は、役員もそうですが、選考委員にも報酬はありません。設立以降、実に40名もの先生方が委員として審査に関わってくださいました。ただただ無私に、審査を通して財団の研究事業を支えておられます。今日があるのは、先生方お一人お一人のおかげであることは申し上げるまでもありません。

現在の選考委員の先生方は7名です。30周年を機に先生方のメッセージをお届けします。



赤レンガ・エントランス

長嶋会長、赤レンガ・回廊



表紙の写真

旧海軍兵学校(通称赤レンガ)と大講堂です。松本悟初代会長の母校です。旧兵学校の写真は何度か同誌に掲載させていただきましたが、この写真は、昨年11月、召天5年になられる松本先生を偲んで、長嶋会長と訪問した際に撮ったものです。生前松本先生が懇意にされていた水交會支部 佐々木会長(元舞鶴総監)も同伴してください、学校長をはじめ、幹部の方々が直々に赤レンガ内を案内してくださいました。

右側、大講堂は兵学校生徒の入校式、卒業式、また精神教育の場として大正6(1917)年に建造されました。海軍兵学校時代の海軍士官、そして現在は海上自衛隊幹部候補生の旅立ちを見守っています。

30年間、支え続けてくださった皆様に感謝しながら、この一年を過ごして参りたいと思います。

九十九そのえ(1/28)

Brain and Spinal Cord "B & C" Vol. 29-4

- Contents
- ① 財団設立30周年にむけて … 長嶋 達也
 - ② 財団選考委員として思うこと
… 山内 康雄・塩田 浩平・新井 一
 - ③ … 高田 哲・佐谷 秀行・井川 靖彦・數井 裕光
 - ④ 事務局からのおたより

発行日：2023年1月30日 発行者：長嶋 達也 編集者：九十九 そのえ

公益財団法人 日本二分脊椎・水頭症研究振興財団

〒654-0047 神戸市須磨区磯馴町 4-1-6
Tel: 078-739-1993 Fax: 078-732-7350
E-mail: jsatoshi@xa2.so-net.ne.jp
<https://spinabifida-research.com>

表紙写真：旧海軍兵学校(広島県江田島市)